

研究紀要

第13号

1997

財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

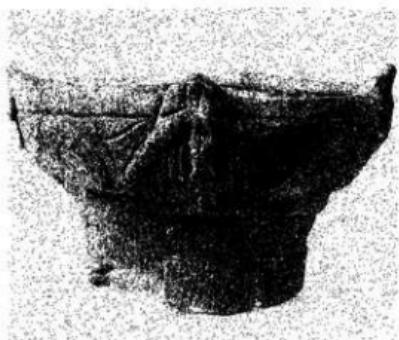
研 究 紀 要

第 13 号

1996

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

写真 1



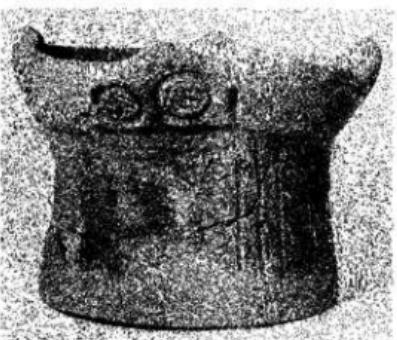
1 包含層



2 包含層



3 10号住居跡



4 9号住居跡



5 15号住居跡



6 包含層

写真 2



7 10号住居跡



8 10号住居跡



9 10号住居跡



10 包含層



11 3号住居跡



12 10B号住居跡

目 次

序

[論文]

- 川越市鶴ヶ丘遺跡C区の石器群 田中 英司 (1)
- 水窪遺跡の研究 谷井 彪 (13)
—加曾利E式土器の編年と曾利式の関係からみた地域性— 細田 勝
- 埼玉県内における柄鏡形住居跡の地域的様相 (1) 鈴木 秀雄 (67)
- 手焙形土器の研究 (2) 高橋 一夫 (85)
—伊勢湾・近江・北陸編—
- 馬鐸と馬鐸装馬形埴輪 中村 倉司 (141)
- 関東地方出土の古代權衡資料 福田 聖 (169)

馬鐸と馬鐸装馬形埴輪

中村倉司

《目 次》

はじめに	(3) 分布と系譜
1、馬鐸	3、馬鐸と馬鐸装馬形埴輪
(1) 編年	(1) 馬鐸を装着する部位
(2) 馬鐸を出土する古墳	(2) 馬鐸の数
(3) 古墳から出土する馬鐸の数	(3) 馬鐸と馬鐸装埴輪の分布
(4) 分布	まとめ
2、馬鐸装馬形埴輪	(1) 馬鐸と馬鐸装埴輪の関係
(1) 分類	(2) 馬具は「畿内政権」からの下賜品か
(2) 編年	おわりに

はじめに

ある遺跡を調査していた。「何か出た」という作業員の移植縫の先に青銅色の異物を見た。「小銅鐸だ、県内初だ」と思いが駆け巡った。しかし、すぐに文様がなく(裏面)、鋲が大きく湾曲していることに気付いた。そう言えばツマミの形もおかしい。新型式だろうか。同僚に報告すると「バタクだ!」と叫んだ。はじめて、「馬鐸」の存在を知った。10年前の埼玉県深谷市東川端遺跡での出来事である。不思議なことに古墳時代の馬鐸が、奈良時代の溝から出土したのである。その間約200年、馬鐸はどのような経緯でこの集落に持ち込まれたのだろうか。伝世したのか、それとも当時の人が墓荒らしをしたのだろうか。

東京国立博物館の蔵品で重要文化財に指定されている埼玉県熊谷市出土の馬形埴輪がある。ある美術書によれば、「飾馬の典型である。数多い馬形埴輪の中でも抜群の作柄である」という。胸繫の馬鐸を含め馬装を完備していることから、馬具の名称模式図として多用されている。そのために馬形埴輪には馬鐸装のものが基本であるかのような錯覚にとらわれている感がある。しかし、馬鐸装馬形埴輪は意外と少ないものである。

殉葬の希薄な我が国では、馬具の出土状態から馬装を復元するのは困難である。馬具の組成が全て出土することはなく、その一部が出土することが多い⁽¹⁾。いっぽう馬形埴輪には多彩な馬具が表現されているものが多く、当時の馬装をかいざまることができる。馬形埴輪が馬装を忠実に表現しているか否かは検討しなければならないが、この問題を検討することも本稿の目的の一つである。

ところで、我が国に馬がもたらされたのは、4世紀後半と考えられている。それに伴い馬具も拠米した。5世紀中葉頃までの馬装は、比較的装飾性の乏しいものであった。それは馬具が実用品で

あったためである。しかし6世紀代に関東で埴輪文化が華開くのと同時に馬形埴輪は、装飾性豊かな「飾り馬」が盛行する。「実用馬具」から「装飾馬具」へと展開するのである。実用馬具とは、実際に馬を制御するもので銜嚙から繋がる手綱などの面繩や鞍、鐙などである。また胸繩・尻繩も鞍を安定させるために必要な実用馬具である。それに対して装飾馬具とは、面繩に着けられる特異な鏡板、胸繩・尻繩に着けられる馬鐸・杏葉・馬鈴・環鈴・旗差し物・歩幅付飾金具などである。実用馬具にも種々の装飾が付加される。本稿では、装飾馬具のうち馬鐸について馬形埴輪との関係を検討してみたい。

なお、馬鐸と馬鐸装馬形埴輪の関係を論じるにあたり杞憂を隠せない。なぜなら馬形埴輪は、図録などに掲載されている写真などから観察したものが多いからである。実見すると後補されているものが予想どおりとはいえた多かった。今回の集成も資料を実見することなく文献から読み取ったものがあり、多くの誤認があろうことを前以てお断りしておきたい。

1. 馬鐸

(1) 編年

馬鐸は、大陸・半島に起源をもつ。現在確認できる最古級の例は、大陸では漢代、半島でも1世紀代のもの(慶尚南道茶戸里遺跡例)が存在する(東京国立博物館1992)。我が国では、長崎県豊玉町(対馬)シゲノダン遺跡・同佐保遺跡出土例が古く、弥生時代中期に比定されている(東京国立博物館1992)。しかし、これは特異な例であり、古墳時代の馬鐸とは直接的に関連するものではない。

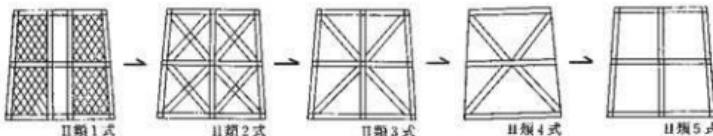
近年、馬鐸を集成・編年し、種々の問題を論じたものに河原隆彦の「馬鐸の出土地及びその編年と考察」(河原1982)、大橋泰夫の『葦の宮神社古墳・米山古墳』(大橋1986)と瀧瀬芳之の「IV馬鐸について」(瀧瀬1990)がある。上田は35例・50点、大橋は56例・117点、瀧瀬60例・129点を集めた。

大橋は馬鐸の変遷を先学の成果を踏まえての見解ではあるが「古い一群のものはみな小型であり、時期が降るにつれて大型化する傾向にある」とし、更に「大型化に伴い鉢の形態も、やや小振りの棱環・円環を呈したもののから、堅牢な方形の板状を呈した大振りのものに変化する」とまとめている。これを踏まえて小形品をI類、大型品をII類とし、II類を文様の種類によって1~7式に細別し、これらをI類からII類7式に向かって進化論的に変遷するとした(第1図)。また、I類の大部分を舶載品、II類以降の製品を国産品と考えた。更に製作方法・装着方法・馬装など多岐にわたって検討を行なっている。

瀧瀬は大橋の成果を参考にして、資料を集成・分類し編年案を示した。馬鐸の変遷に関し、「文様の違いがそのまま馬鐸の変化を表すのではなく、それはむしろ異なる複数の系列が存在していることを示していると考えるべきではないだろうか」とし、大橋が設定したII類のおおよその各型式の文様の相違を「系列」と捉え、それぞれ独自に変遷するものと考えた。そして5世紀を2期(I・II期)、6世紀から7世紀初頭までを4期(III~VI期)の計6期の変遷観を示した。「馬鐸は6世紀のおわりにはほとんど姿を消す」としたが、7世紀前半にも型式的範疇を逸脱するものが存在するとした。第2図は、瀧瀬の論考をもとに作成した変遷図である。本論では瀧瀬説の編年観を採用し、論を進めていきたい。

番号	所 在 地	名 称	時 期	数	道 構	規 格	備 考
1.	吉野郡船出町	古ノ内寺跡	5後	1	円	19	
2.	高島郡柏原町	高橋山古墳群	6中~後	3	円	16	開闢
3.	高島郡柏原町	大丸山古墳	6前	2	横六穴	1字板	
4.	高島郡柏原町	高橋山古墳	6前	3	前方後方	—	
5.	高島郡柏原町	高橋山101号墳	5後	1	円	40	三脚鉄・鉛
6.	高島郡柏原町	高橋山102号墳	5後	3	前方後円	70	開闢合掌3・鉛錠
7.	高島郡柏原町	上野古墳	6初~後	3	円	46	
8.	高木郡山神町	里の宮神社古墳	6初~後	3	円	—	
9.	舞鶴郡高見町	?	6前	5	—	—	
10.	舞鶴郡高見町	保坂山古墳	6前	3	前方後円	105	開闢古墳。(二字板)
11.	舞鶴郡高見町	保坂山古墳	6前	1	円	—	
12.	舞鶴郡高見町	高瀬山古墳	7前	4	前方後円	60	心臓合掌3・花形合掌2・鉛
13.	舞鶴郡高見町	高瀬山古墳	6前	4	円	17	—(鉛錠)3
14.	舞鶴郡高見町	新光寺裏山古墳	6初	1	前方後円	53	
15.	太田市	方舟原	5前	1	—	—	
16.	高畠郡高取町	?	5	1	—	—	
17.	高畠郡高取町	山田川沿い古墳	6前	1	—	—	
18.	高畠郡高取町	?	6後	1	—	—	
19.	大河内町佐波山	佐波古墳	6末~7	3	円	?	大形
20.	佐野市	柳原寺古墳(大河川)	6前~後	4	前方後円	90	越塚? (鉛・刺茎青葉)
21.	佐野市	東今泉古墳	6前	2	円	—	
22.	佐野市	木更津古墳	6後	2	円	—	西形
23.	佐野市	金輪寺古墳	6中~7	6	前方後円	95	青葉
24.	那珂郡那珂川町	理政3号墳・調塚	6中~後	1	円	56	
25.	那珂郡那珂川町	伊良丘村	6中~後	2	—	—	
26.	那珂郡那珂川町	多摩	6中~後	1	—	—	
27.	那珂郡那珂川町	大井	6中~後	2	—	—	
28.	那珂郡那珂川町	八幡2号墳	6前	5	円	?	鉛・刺茎青葉
29.	那珂郡那珂川町	心臓古墳2号墳	6末~7	3	円	18	鉛・刺茎青葉
30.	那珂郡那珂川町	京塙古墳	6中~後	3	円	?	二脚鉄
31.	那珂郡那珂川町	石佐ノ崎古墳	6前	2	円	—	
32.	那珂郡那珂川町	二子山(岸)古墳	6前	5	前方後円	64	五脚古墳・二脚鉄
33.	那珂郡那珂川町	弓削新八号墳	5後	1	円	25	鉛(鉛上底G5号墳)
34.	山田郡山田町	山田古墳	6前	1	—	—	(鉛)鉛2
35.	洪賀郡栗原町	栗原1号墳	5前	3	円	?	二脚鉄2
36.	吉野郡吉野山町	高瀬3号墳	6前	3	円	20	
37.	吉野郡吉野山町	吉野女郎山古墳	6~7	1	前方後円	48	開闢合掌・開立口式
38.	木津川市	吹張石之塚古墳	6~7	1	—	—	
39.	奈良郡御所町	?	—	—	—	—	
40.	大阪府茨木市	吉松塚古墳	6~2	2	円	20	開闢合掌3
41.	茨木市	石川山古墳	6中~後	2	前方後円	446	二脚鉄
42.	茨木市	白鳥山古墳群	5~3	1	—	—	
43.	北摂郡忍野町	長尾タイ1号墳	6~3	1	円	15	
44.	北摂郡忍野町	タイ山	6~3	1	—	—	1号墳の可能性がある。
45.	北摂郡忍野町	常ノ原古墳	6~3	1	—	—	
46.	南丹郡日吉町	蓋ノ原古墳	6~3	1	円	—	
47.	南丹郡日吉町	御幸山西古	6~3	1	—	—	
48.	鳥取県鳥取市	久米	6~3	1	—	—	
49.	鳥取県鳥取市	六瀬山1号墳	6前	1	円	28	杏葉
50.	鳥取県鳥取市	氣高1号墳	6~2	2	円	—	
51.	鳥取県鳥取市	ハンボ原古墳	5後	1	円	33	同上
52.	島根郡山雲町	人食寺古墳	6~3	3	前方後円	84	稻田杏葉・鉛
53.	島根郡山雲町	めんぐる古墳	6初~前	3	円	?	—(鉛)1・錠頭
54.	島根郡山雲町	小丸山古墳	6前	2	前方後円	—	
55.	鹿足郡大原町	猪屋古墳	—	2	—	—	
56.	宍粟郡宍粟町	宍粟東京山古墳	6前	4	円	14	鉛
57.	宍粟郡宍粟町	扇子山2号墳	6前	2	円	—	
58.	船岡郡吉井町	片ノ崎古墳	5後	2	前方後円	95	二脚鉄
59.	船岡郡吉井町	金立塚古墳3号墳	6切	1	円	—	
60.	佐用郡佐用町	船見古墳	6~2	3	円	25	五脚古墳3・二字板
61.	大分県佐伯町	山ノ原1号墳	5後	1	圓 直	55	
62.	大分県佐伯町	山ノ原2号墳	5後	1	圓 直	55	
63.	吉野郡吉野町	下北方1号墳	5末	1	機	穴	心臓杏葉
64.	吉野郡吉野町	えびの市	5前	1	機	穴	二字板
65.	吉野郡吉野町	えびの山	6初	2	機	穴	心臓杏葉
66.	不詳	豊島町物頭塚	5前	1	—	—	
67.	不詳	羽井井上コレクション	5後・6	2	—	—	
68.	不詳	人間山立墳物頭	6	1	—	—	

第1表 馬跡



第1図 馬跡文様変遷模式図 [『草の宮神社古墳・米山古墳』(大槻1986) より]

第一期 5前				
第二期				
5後				
第三期	斜格子文系 珠文系 4区斜線文系 		朝鲜出土 2区斜線 8区無文系 交差文系 文系	
6初				
第四期				
6前				
第五期				
6中～後				
第六期 6末～初				中國製

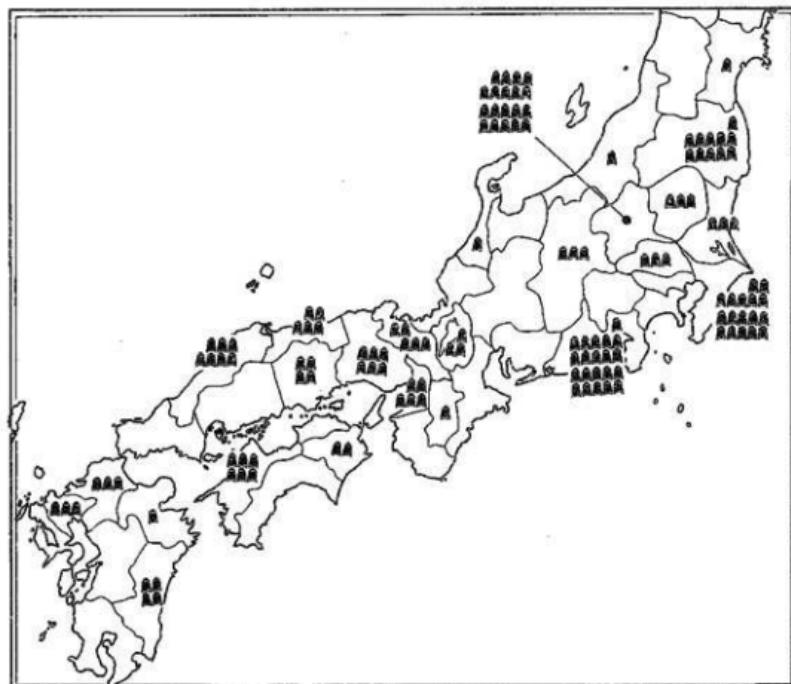
第2図 馬鐸変遷図（「東川端遺跡」（成瀬1990）より改図）

なお、瀧瀬の集成にその後管見したものを追加すると64遺跡・141点が確認されている(第1表)。

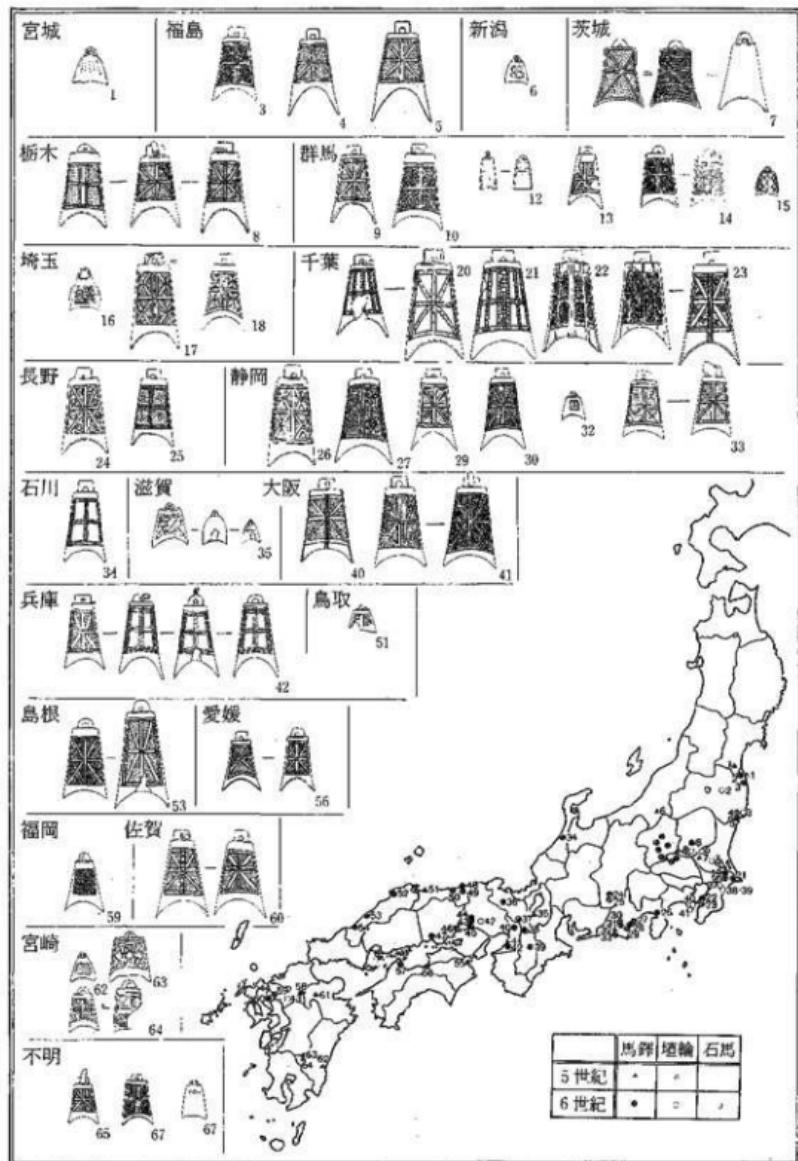
(2)馬蹄を出土する古墳

5世紀代の馬蹄出土の前方後円墳には、茨城県上野古墳(75m)・福岡県月ノ岡古墳(95m)がある。これらは、それぞれの地域を代表的する初期古墳である。円墳には、宮城県吉ノ内古墳(19m)・新潟県飯綱山10号墳(40m)・静岡県勾坂新A5号墳(25m)・滋賀県新聞1号墳(?)m)・鳥取県ハンボ塚古墳(33m)がある。これらの古墳は、特に大きな規模を有する訳ではないが、三環鉢を共伴するなどの特徴を有している。古墳以外では大分県おごもり1号墓が周溝墓・宮崎県下北方5号墓・同小木原3号墓・同馬頭1号墓が地下式横穴がある。これらは地域が限定され、墓の型式も特異であることから、先述した前方後円墳とは同等に扱うことはできないものと思われる。

6世紀前半の馬蹄出土の前方後円墳には、群馬県保渡田薬師塚古墳(105m)・同宗永寺浦東塚古墳(53m)・千葉県禪昌寺古墳(90m)・静岡県二子山古墳(64m)・京都市物集女車塚古墳(48m)・島根県小丸山古墳(?)がある。これらは、それぞれの地域を代表的する有力な古墳である。円墳には、福島県小池原8号墳(10m)・大阪府青松塚古墳(20m)・島根県めんぐろ古墳(?)・愛媛県斐鳥東宮山古墳(14m)・佐賀県潮見古墳(25m)・同県金立地区3号墳(?)がある。これらは特に際立った規



第3図 馬蹄の分布と出土数



第4図 馬蹄と馬鋤装馬形埴輪の分布

模を有していないが、島根県めんぐろ古墳では鏡や鉢釧、愛媛県斐鳥東宮山古墳では金銅製冠・冑・鏡・三葉文環頭太刀、佐賀県瀬見古墳では馬具のほか冠・挂甲などが出土しており、有力な被葬者の存在が予想される。

6世紀後半の馬鐸出土の前方後円墳には、群馬県上滝前山塚古墳(60m)・千葉県金鈴塚古墳(95m)・島根県大念寺古墳(84m)がある。前方後円墳は、各地域の代表的なものである。円墳には、福島県小池原古墳(10m)・栃木県足の宮神社古墳(16m)・千葉県鶴巻塚古墳(?)・同県谷中古塚古墳(大形?)・静岡県高根森古墳(18m)・同県京塚古墳(?)がある。円墳は特に際立った規模を有していない。

(3) 一古墳から出土する馬鐸の数

5世紀代では、茨城県上野古墳・滋賀県新開1号墳で3点、福岡県月ノ岡古墳・宮崎県馬頭1号墓で2点、その他では1点である。1点の馬鐸を馬装として使用する可能性は少ないとから宝器的な意味合いが強いものと思われる。該期の馬装は、三環鈴と共に伴するものが顕著である。なお、該期の馬鐸は、船載品と考えられている。

6世紀前半では、3~4点のものが多く、馬装を比較的忠実に表わしているものと思われる。1点を出土した群馬県宗永寺裏東塚古墳・佐賀県金立地区3号墳は、6世紀初頭のものであり、前時期と同様な宝器的な保有形態を有している。共伴装飾馬具は多様である。三環鈴を共伴するのは、静岡県二子山古墳・島根県めんぐろ古墳(1点)、剣菱形杏葉を共伴するのは群馬県保渡田薬師塚古墳・千葉県禪昌寺古墳・大阪府青松塚古墳(3点)、鈴杏葉を共伴するのは群馬県金五塚古墳(3点)・静岡県二子塚古墳(2点)・佐賀県瀬見古墳(3点)がある。該期以降、尻繁に剣菱形杏葉・鈴杏葉が装着されるようになる。

6世紀後半では、3~4点のものが多い。共伴装飾馬具には、鈴・鈴杏葉・心葉形杏葉・横円杏葉・花形杏葉など多様である。

(4) 分布(第3・4・8図)

5世紀代では、宮城県から宮崎県までの広範な地域に散発的に分布し、特に集中する地域はない。しかし畿内から遠く離れた宮城県、新潟県、大分県・宮崎県などの周縁地域に認められるという特異な分布の有り方を示している。6世紀前半では、前時期の分布範囲を若干狭めるが、各地に散在し特に集中する地域はみられない。6世紀後半になると四国・九州には認められず、千葉県北部や良野・静岡県などの特定地域に集中する。

馬鐸出土古墳は、群馬・静岡のように集中している地域と特定の地域に一定の距離を保って分布する地域に分類される。またその個体数(第3図)から見ると、際立って福島・群馬・千葉・静岡に集中している。

2. 馬鐸装馬形埴輪

馬形埴輪の研究は、井上裕一によって精力的に進められ大きな成果を上げている。井上は馬形埴輪の製作技法の分析からその編年を確立し、その精緻な観察によって埴輪製作の工人の交通関係までも明らかにした。更に、馬形埴輪の馬装からその歴史的背景を描き出すなど精力的な研究が実を

番	所 在 地	古 墓 名	時期	鉛	杏葉	鋒	分類	墳 形	規模	鏡板	鏡	瓦 捨	文 献	
1	福島県相馬市	丸尾古墳	5-4	/-	/	5/2	II C 2イ	円?	30c	「子」?	五 鈴 銅	今津1988		
	刺離鏡を残すのみであるが、大きさ・三角台形の底辺が上方に湾曲しているもの（左側の楕円形の刺離鏡）があることから馬蹄と思われる。共伴資料のなかに板状の表面に竹管文を配するものがあり、これが刺離した馬蹄片と考えられる。前方後円溝の可能性もある。鶴本博辛氏のご協力を得た。相馬市教育委員会蔵。													
2	福島県大玉村	久高原古墳	6-2	?	?	?	○?	III B'ハ	円?	22	?	?	実見 破片資料であるために復原した。馬形埴輪は2体以上存在する。大玉村教育委員会蔵。戸田伸太氏のご協力を得た。	
3	福島県いわき市	神谷作101号墳	6-3	?	?	?	○	IV A 3ハ	前方後円?	E子?	?	?	実見 10数点以上の馬蹄片があるが、小破片のため全体の形態を復原できる資料は無い。回示した資料も確定的な形態ではない。福島県立磐城高校蔵。	
4	茨城県東海村	白方5号墳	6-3	-	-	5/?	IV B' 2イ	前方後円	27	十字	壹?	?	浅木1993	
	6点の同形の馬蹄片が出土している。													
5	茨城県東海村	石神小学校内	6-2	○	-	○	IV C 1イ	-	-	「子」?	?	?	茨城県1974 破片で出土。馬蹄は腹型か否か不詳。銅鏡を有する跡あり。面鏡も刺離表現あり。所在地不明。	
6	茨城県大和村	?	?	?	?	?	○	○	2	?	?	?	-	
	茨城県立歴史館の瓦吹堅氏の解説による。また茨城県立歴史館蔵品に胸蓋に鋒と馬蹄と思われる飾りものを装着した馬形埴輪があるが、後補の可能性もあるし、また馬蹄と断定できないのでここでは割愛しておく。													
7	茨城県土浦市	真鍋町	6-3	-/-	-/-2	3/-	IV A 1ホ	-	-	f	穂	二鈴合葉	塙谷1990 写真より作図。個人蔵。塙谷 氏のご協力を得た。	
8	茨城県小山市	拂坂山田跡塙古墳	6-3	?	?	?	○	○	1Dイ	前方後円	55	十字	壹 剣菱吉葉?	浅木1980 破片で出土。朱文土鈴・馬形埴輪は2体以上。不詳。鉛と鋒は附。
9	群馬県箕郷町	上芝古墳	6-3	-/-	-/-2?	3/-	IV A 2ハ	帆立貝式	15	I	壹	劍菱形	群馬1996 東京国立博物館蔵。	
10	群馬県群馬町	保渡田八幡原古墳	6-1	-	-	○	IV B' 3ロ	前方後円	102				実見 後脚であるが、製品型に近い形で複合している。田辺芳昭氏のご協力を得た。群馬町教育委員会蔵。	
11	群馬県高崎市	若宮八幡北古墳	5-4	○	○	○	II B 4ロ	帆立貝式	46	鷹?	輪	二鈴合葉	南雲1995 本古墳からは2種の馬蹄が出土している記載されているが、1点は、複数と考えられるので割愛した。高崎市教育委員会蔵。	
12	群馬県高崎市	少林山台12号墳	6-1	?	?	?	4?	?	II B'ロ	円	20		塙江1993 文様を描く面を取りしている。復元資料。高崎市教育委員会蔵。	
13	群馬県玉村町	オトカ原古墳	6-4	/	/	4/2	IV A 2ホ	前方後円	47	?	-	馬	鈴・群馬1996 被を戴せない馬蹄。炎見、玉村町教育委員会蔵。	
14	群馬県新潟村	白塚P6号墳	5-4	5/-	-/-3	3/?2	IV B' 1イ	円	18	f	鋒	三鈴杏葉?	小島1989 実見、小島鶴一氏のご協力を得た。鶴川村教育委員会蔵。	
15	群馬県赤堀町	?	?	6-2	4/-	-/-	-/-2	IV B' 1イ	-	-	一方形	輪	馬 鈴・下池1993 示したのは右後ろの馬蹄。左の馬蹄は長幅より実物に近い形を呈する。実見。坂下浩・横田 宏氏のご協力を得た。坂下小立博物館蔵。	
16	群馬県東村	下谷古墳群	6-4	-	-	?	○	IV C 2ホ	前方後円?	-	-	-	実見 馬蹄のみ。柏川之義氏のご協力を得た。柏川 古考叢蔵。	
17	群馬県東村	雷電神社跡古墳	6-4	-2?	-?	3/-	IV B 1ニ	前方後円	56	9頭	壹	格	丁 松村1969 東村7号墳。瓦束から既観すれば、車輦形狀の文様が描かれているように見える。胸蓋との連結具表現は、焼玉忠飼手長山古墳例と同じ。個人保管。	
18	群馬県太田市	井大塚古墳	?	?	?	?	??/?	?	円	8	?	?	群馬1996 文献に記載されているが、未確認。	
19	群馬県内1・2	-	6-2-3	-	-	○?	①IV A 3イ・②IV A 1ニ	-	-	-	-	-	井上1988 写真より作図。1は製品型とも観察できる。八毛子資料館蔵。	
20	埼玉県本庄市	冴勝寺北裏空跡	6-3	-/-	-/-	○	IV A 1ニ	-	-	-	-	-	長谷川1976 美見、長谷川勇・佐藤好司氏のご協力を得た。	
21	埼玉県本庄市	伝御手長山古墳	6-4	-/-2	-/-?	2</?	IV A 3ニ	前方後円	?	?	?	?	鈴杏葉?	実見 美見、長谷川勇・佐藤好司氏のご協力を得た。佐藤氏によれば本資料は、御手長山古墳出土の可能性が極めて高いといふ。本庄市教育委員会蔵。
22	埼玉県本庄市	東五十子古墳群	6	/-	/	○	IV B 1?	?	?	?	?	?	実見 太田博之氏のご協力を得た。岡山市冴勝寺北裏埴輪部跡と同型の資料と認識したが、冴勝寺では資料の存在を標記できず、筆者の認証の可能性がある。	

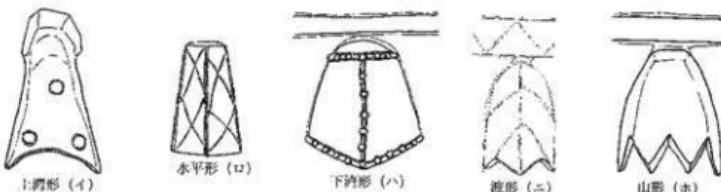
第2表 馬蹄装の馬形埴輪（1）（鉛・杏葉・鋒。左は胸蓋を表す）

動	所 在 地	古 墓 名	時 期	鉗	杏葉	屏	分 類	墳 形	肩板	鏡	灰 罂	文 献
23	埼玉県深谷市	木の本10号墳	6・3	○	—	4	NB2-	前方後円	41	—	—	埼玉県1994
4点の同形の馬跡が出土。分離して出土。												
24	埼玉県深谷市	鶴山8号埴輪室跡	6・1	3/-	-/-	-/2	NAl-	—	—	?	—	馬 鈴 宮崎1981
瓦塗に袋着。実見。埼玉県立博物館保管。												
25	埼玉県熊谷市	上中条	6・2	-/-	-/2	4/-	NAl-	—	—	f	繪 十字杏葉 小林1960	
鏡の形値は示したものと相違する可能性がある。尻繋の三鈴杏葉は後補。東京国立博物館蔵。												
26	伝埼玉県熊谷市	?	6・2	-/-	-/2	4/-	NB1-	—	—	f	繪 十字杏葉 田中1992	
実見。田中駿二氏のご協力を得た。H中間文化館蔵。												
27	埼玉県行田市	二子山古墳	6・1	○	—	○	NB2-2	前方後円	135	?	輪	口高1992
製品型の可能性もある。埼玉県立さきたま資料館蔵。												
28	埼玉県行田市	愛宕山古墳	6・1	○	—	○	NB2-2	前方後円	53	—	—	青藤1994
2点の同形の資料を出土。製品型の可能性もある。埼玉県立さきたま資料館蔵。												
29	埼玉県行田市	尾原古墳1・2	6・3	—	—	—	4?/? NB2-2	前方後円	71	—	—	口高1992
実見。2つの車(分鏡)の存在が想されるが、あるいはH型かも知れない。岡本健一氏のご協力を得た。埼玉県立さきたま資料館蔵。												
30	埼玉県行田市	大洋寺裏古墳1・2	6・2	—	—	—	○ NB2-2	前方後円	40<	—	—	青藤1994
報告によれば40mmの円墳と記されているが、前方後円墳の可能性がある。												
31	埼玉県菖蒲町	東浦古墳1・2	6・3	?	-/-	4?/? NB2-2	前方後円	55	?	輪	実見	2機の馬跡が存在する。実見。二ツ木貴夫氏のご協力を得た。菖蒲町教育委員会蔵。
2機の馬跡が存在する。実見。二ツ木貴夫氏のご協力を得た。菖蒲町教育委員会蔵。												
32	埼玉県鴻巣市	生出原埴輪室跡	6・3?	?	—	○ NB2-2	輪	—	—	—	—	—
文様などの特徴は、埼玉県鴻巣町東浦古墳に酷似するという。山崎式氏のご教示による。鴻巣市教育委員会蔵。												
33	埼玉県東松山市	桜山墓跡	6・3	-/-	-/-	4?/? NB3-	—	—	f	繪 三鈴杏葉 堀垣文1982		
網張のみ。他の鏡の網張。												
34	埼玉県東松山市	岩鼻5号墳	6・2	-/-	-/3	4/-	NB2-	円	20	—	三鈴杏葉 江原1993	
古あり。												
35	埼玉県桶川市	川田谷	6後	-/-	-/2	○/-	?	—	—	f	?	三鈴杏葉 東博1983
報文に記載。												
36	埼玉県桶川市	古谷上	6・2	-/-	-/2?	2?/-	NC2	—	—	?	輪 二鈴杏葉 東博1983	
写真より確定復原。縮尺6不詳。												
37	千葉県芝山町	山田18号墳	6・1	-/-	-/2	3/-	HB3-4	円	26	?	繪 ?	鎧杏葉 ? 平岡1993
実見。圓鏡 元氏のご協力による。芝山町立芝山古墳・はにわ博物館蔵。												
38	千葉県猿芝町	施塚古墳1・2	6・4	-	—	○	IA1	前方後円	88	?	?	無 ? 実見
名勝根岸氏のご協力による(38-1)。杉山晋作・井上裕一・日高慎の各氏の師教示によれば、図示した資料の他(38-2)に沈鏡を記すものも存在するという。瓦塗は無飾の格子瓦塗の可能性が高い。芝山ミュージアム蔵。												
39	千葉県猿芝町	施塚古墳	6・4	-	—	○	ND	前方後円	58	?	?	劍鍊・無 実見
瓦塗は格子瓦塗で劍鍊を含まない無飾の可能性が高い。杉山晋作・井上裕一・日高慎の各氏のご協力を得た。芝山ミュージアム蔵。												
40	奈良県橿原市	參摩古墳	6・2	-/-	-/2	5/-	HB3-2	前方後円	28	f	輪 二鈴杏葉 小林1960	
図示したのは在から2番目の資料。墳形は帆立貝式の前方後円墳。森下豊司氏のご協力による。京都大学蔵。												
41	奈良県橿原市	大椿寺古墳	6・2	-/-	-/3	2/-/-	NAl-2	円?	?	?	輪 二鈴杏葉 実見	
ケース越しに観察。作図。神奈川県立博物館蔵。												
42	兵庫県龍野市	タイ山1号墳	6・3	-/-	-/2?	-/2?	3/-	ID八	円	15	?	輪 心葉杏葉 上田1982
瓦塗は鉛なし杏葉												
43	福岡県八女市	岩戸山古墳	6・2	-/-	-/-	5/-	ID1	前方後円	135	?	輪 心葉杏葉 田村旅1985	
石鳥。文歌(田村他1985)によれば、右馬は2体存在し、共に馬薄綾のようである。実見。八女市教育委員会蔵。												
44	佐賀県	岡寺古墳	6・4	4/-	-/-	-/2?	—	前方後円	75	—	—	石野1992
報文に記載。												
45	?	?	6	-/-	-/2?	○/-	?	—	—	?	輪 二鈴杏葉 東博**	
報文に記載。												
46	?	?	6	/	-/2?	3?/-	?	—	—	?	輪 鈴杏葉 ? 森他1991	
『古代奈良と朝鮮』の中扉に小さな写真が掲載されている。馬姿は複数である。古代学協会蔵。												

第2表 馬跡袋の馬形埴輪(2)



第5図 馬形培輪に装着された馬蹄の分類



第6図 舞の形態分類

結んでいる(1985・95a・95b・96)。その他の馬形埴輪に関する研究には、宮崎由利江「裸馬の埴輪に関する研究」(宮崎1987)、同「埼玉県における馬形埴輪の消長」(宮崎1989)、同「馬形埴輪に伴出する人物埴輪について」(宮崎1990)や南雲芳昭「群馬県における馬形埴輪の様相」(南雲1991)、同「馬形埴輪における騎馬の基礎的研究」(南雲1993)等によって進められている。

馬形埴輪は馬装という観点から見ると多様な飾りものを装着した「飾り馬」・鞍を載せただけの「鞍馬」・手綱のみの「裸馬」に分類される。これらには、騎馬のものも散見する。飾り馬や鞍馬は、乗馬用である。また鞍を載せない裸馬は、片手綱のものが多く使役に供した駄馬と思われるが、なかには両手綱のものがあり乗馬に供したものも存在する。一方、飾り馬の中にも鞍を載せないものが群馬県オトカ塚古墳・埼玉県上里町編笠古墳例があり、馬形埴輪の多様性が指摘できる。

以下、馬鐸装馬形埴輪について分類・編年・分布について述べていきたい。馬鐸装馬形埴輪は、未確認のものを含めて第2表のとおり46遺跡(出土地不明を含む)・50点を確認⁽²⁾した。それでは、馬形埴輪に表現された馬鐸の分類から記していきたい。

(1) 分類(第5図)

成形から見ると板状の扁平型⁽³⁾(1)・粘土塊の中実型(II)・単体として筒形に表現した製品型(III)・器面を覆う複型(IV)の4型に分類される。また文様からは、珠文系(A)・沈線文系(B)・刺突文系(C)・無文系(D)の5種に分類される。なお、以下の○数字は第5図・第2表の番号である。

珠文系のなかには、珠文だけのもの(A1)⑩・隆帶と組合わされたもの(A2)⑪・沈線と組合わされたもの(A3)⑫がある。沈線文系には、鈍い太沈線文系(B)と鋭い細沈線文系(B)がある。太沈線文系には、単綫杉文(B1)⑬・区画文萍文(B2)⑭・文差文(B3)⑮・格子文(B4)⑯がある。細沈線文系には、複綫杉文(B1)⑭・交差文(B2)⑮・梯子状文(B3)⑯がある。刺突文系には、小さく鋭いもの(C1)⑰と竹管によるもの(C2)⑱の二者がある。

舞(裾)の形態は、忠実に模倣した上方に湾曲するもの(イ)・直線的に水平なもの(ロ)・下方に湾曲するもの(ハ)・波形なもの(ニ)・山形なもの(ホ)などがある(第6図)。(ロ)を除き、麓切りで直線的に成形したものがある。また舌を表現したものと無いものがあり、後者には' (グッシュ)を付す。

それでは各型別に説明していく。扁平型には、刺突系・無文系の二者、4例がある。兵庫県タイ山1号墳例⁽⁴⁾42は、楕円形の粘土板を貼付したのみであり、文様も無く舞の形態も意識されていない。他例の舞は、上方に湾曲し比較的忠実に模倣している。福島県丸塚古墳例①は、剥離痕跡からそれがわかる。福岡県岩戸山古墳例は⑩石馬であるが、舌が表現されている。

中実型は、沈線文系のみであるが、描出方法はそれぞれ相違する。群馬県若宮八幡神社古墳例⑪は太沈線で格子状に表現している。千葉県山田宝馬188号墳例⑫は数条の縦沈線内を梯子段状に条線で埋めている。群馬県少林山台12号墳例⑬は四面に面取りし、綾杉状に沈線を充填している。

製品型は、珠文系の千葉県殿塚古墳例⑭と沈線型の福島県久遠壇古墳例⑮と埼玉県瓦塚古墳例⑯がある。なお埼玉県瓦塚古墳例⑯は、同東裏古墳例⑰と類似するが後者は覆型である。

覆型は珠文系・沈線系・刺突系・無文系がある。珠文系は、珠文のみのもの他に隆帯や沈線と組合わされたものがある。隆帯と組合わされたものには、群馬県上芝古墳⑯・同オトカ塚古墳⑰・神奈川県大船寺古墳例⑱がある。上芝古墳例⑯・大船寺古墳例⑰は隆帯上に前者は密に後者は隆帯の交点にのみ珠文を配している。なお埼玉県有勝寺北埴輪窓跡例⑲と同中条例⑲および茨城県真鍋例⑳とオトカ塚古墳例⑰は類似する。太沈線文系は沈線のみで構成され、他の文様と組合わされることはない。単綾杉文には、群馬県白藤P6号古墳⑳や向雷電神社古墳例⑳があり、長期間にわたって存在している。区画交差文には、埼玉県木の本10号古墳例㉑・岩鼻5号古墳例㉒、交差文には埼玉県接山埴輪窓跡例㉓がある。細沈線文系には、複綾杉文の埼玉県二子山古墳例㉔を祖型とし、その周辺に集中して存在する。綾杉文は隆帯によって区画されている。交差文の文様は多様である。刺突文系には、小さく鋭い茨城県石神小学校内例㉕と竹管による群馬県下谷古墳例㉖の二者がある。前者㉕は、2本1単位の沈線を横方向に上端・中央に横方向に区画している。

上述したように馬形埴輪に表現された馬鐸は極めて多様である。実際の馬鐸についても数種の系譜があり、独自の展開を示すものと捉えられている(瀧瀬1990)。馬形埴輪に表現された馬鐸も多様であり、忠実に模倣されたものは無く、実際の馬鐸に対比することはできない。

(2) 編年(第7図)

馬形埴輪は、5世紀後半から6世紀末(ないし7世紀初頭)にかけて展開している。これらを5段階に分けて述べていきたい。なお、○数字は第7図の番号である。

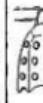
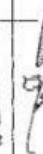
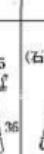
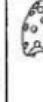
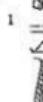
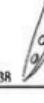
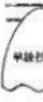
第一段階

馬鐸装馬形埴輪の出現する段階である。扁平型には福島県丸塚古墳例①があり、文様は竹管による刺突文系である。中実型には群馬県若宮八幡北古墳例⑪があり、文様は沈線系の交差文で格子状に表現されている¹⁵⁾。覆型には群馬県白藤P6号古墳例⑳があり、文様は太沈線系の単綾杉文である。舞は上湾曲ないし水平に表現される。舌を表現したものはない。

第二段階

中実型には群馬県少林山台12号古墳例⑬と千葉県山田宝馬188号古墳例⑫がある。前者の文様は沈線系の複綾杉文で、文様の描出面は4面に面取りしている。後者の文様は沈線系で2本1単位の沈線を4本並下させ、その間に梯子状に沈線を充填させている。文様を描出する面は2面に面取りしている。後者は下端を僅かに抉り、馬鐸の筒を表現している。なお、宝馬188号古墳例はより新しい可能性が高い。

製品型には群馬県保渡田八幡塚古墳例⑯があり、文様は中央に隆帯を垂下させ、その左右にそれに交差文を2段に配している。覆型には埼玉県二子山古墳例㉔があるが、製品型になる可能性がある。本例㉔は、隆帯を数状に垂下させ、その間に複綾杉文を配する。この綾杉文の中央には沈

	珠文系	沈線文系	列点文系	無文系
第一段階 5-4		14 	11 	1 
第二段階 6-1	24 	太沈線 12  (綾杉文)	細沈線 10  37  (交差文)	
第三段階 6-2	25  46  14-1  41 	26  34 	28  30-1  31-2  33  35 	5  36  43  (石馬)
第四段階 6-3	20  19-2  7  3  9 	23  35 	30-2  31-1  31-2  29-1  29-2  31-2  4 	8  42 
第五段階 6-4	38  13  21 	17  単錐杉文?		16  39 

第7図 馬形埴輪に表現された馬蹄の変遷模式図

(番号は第2表と一致する)

線が施される。綾杉文は短く、丁寧に描かれている。他に覆型には、埼玉県割山埴輪窓跡例②がある。文様は珠文系で、断面の湾曲は大きい。

舞は上湾曲や水平、舌の表現がないのは前時期と同じである。

第三段階

中大型は存在しない。扁平型には石馬の福岡県岩戸山古墳例④がある。材質の制約によるものと思われるが文様は描出されていない。舞は上湾しており、舌も表現されている。製品型には福島県久遠埴古墳例②がある。文様は沈線系で、縦方向の沈線と綾杉文を配している。舞は下方に突出する。

覆型は多様である。珠文系のものには埼玉県中条例④、伝群馬県⑩-1・出土地不明⑩の各例がある。中条例④の舞は、図示した形態とは相違するかも知れない。伝群馬県例⑩-1は沈線を施し、舞は上方に湾曲し忠実に模倣している。しかし製品型のようにも観察され、とすれば千葉県横芝町姫塚古墳例と類似することから後出の可能性もある。神奈川県大椿寺古墳例④は、隆帶で四角に区画し、その交点に珠文を配している。舞は上方に湾曲し、舌は表現していないようである。

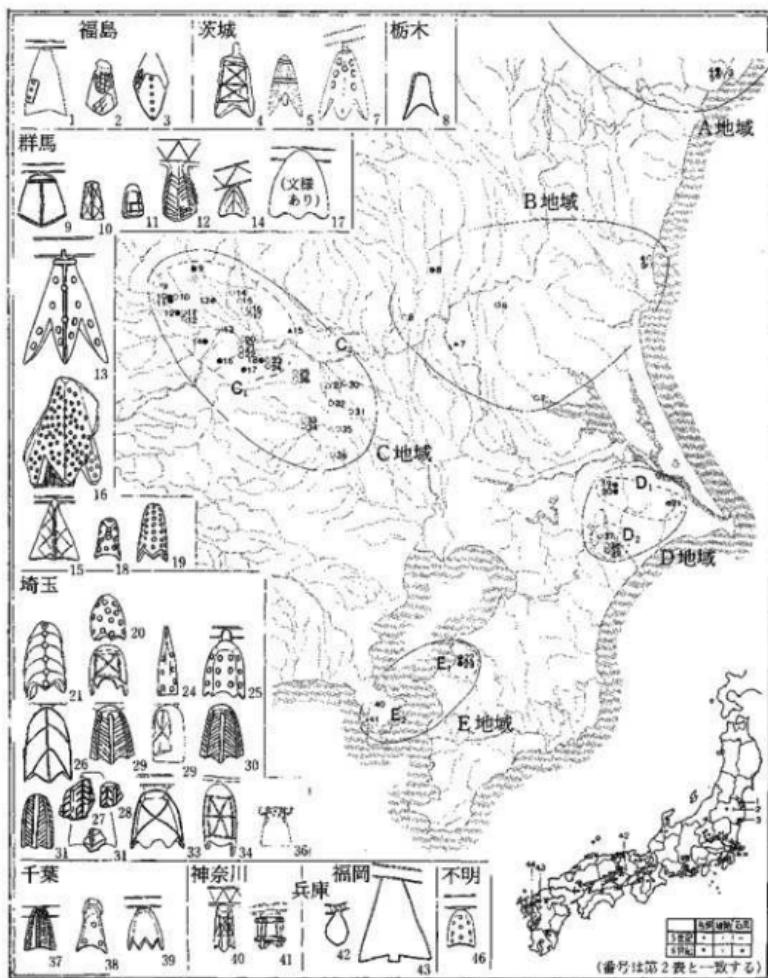
沈線系のものは、更に多様である。太沈線のものには、区画交差文の埼玉県岩鼻5号墳例⑤、単綾杉文の伝埼玉県熊谷市例⑥がある。これらは共に舌を表現している。細沈線のものには、複綾杉文の埼玉県愛宕山古墳例⑦がある。文様構成は先述した埼玉県二子山古墳例⑧に酷似する。同様な文様には、埼玉県天祥寺古墳例⑨-1があるが、この文様は綾杉が長く表現されている。また同古墳例⑨-2では、⑨-1が隆帶間で綾杉を表現していたのに対し、本例は隆帶を抜んで綾杉文を描出するものに変化している。交差文は多様である。伝群馬県赤堀村例⑩では、隆帶を中央に垂下させその両側に交差文を配している。神奈川県蓼原古墳例⑪は、縦沈線を2本垂下させ、その間に斜めの交差文を配している。舞の形態も多様であり、下方に突出するものや波形のものがある。列点文系には、茨城県石神小学校内例⑫がある。上位と中位に平行沈線を施し、それ以外の全面に列点を配している。舞は上方に直線的に切り込んでおり、舌も表現している。

該期の特徴は、覆型が主体を占めるようになり、舞の形態に波形が出現したことである。また、舌を表現したものも顕著になる。

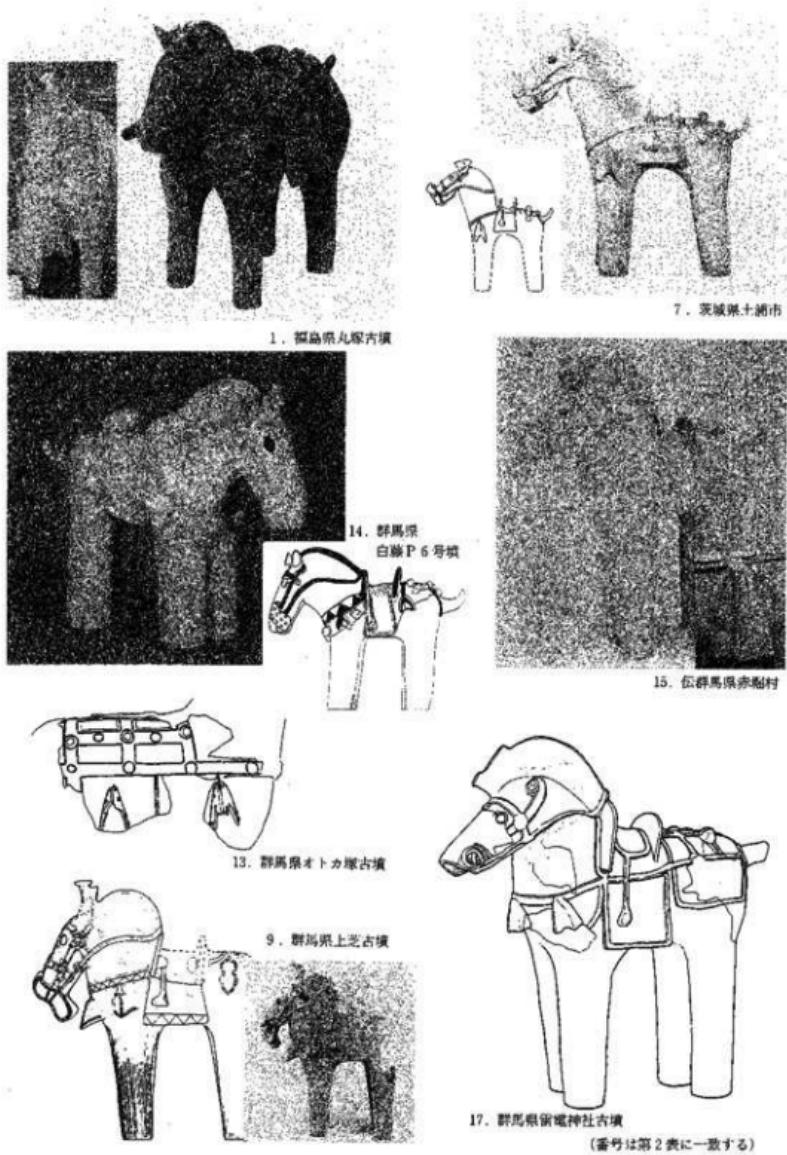
第四段階

中実・製品型は存在しない。扁平型には栃木県横塚山三味線塚古墳例⑧と兵庫県タイ山1号墳例⑩がある。文様は共に描かれていない。舞は前者が上方に湾曲し忠実に模倣しているのに対し、後者は下方に湾曲し全体として梢円形を呈し馬蹄としての意識が欠落している。

覆型は多様である。珠文系には、埼玉県有勝寺北裏埴輪窓跡⑨・伝群馬県⑩-2・茨城県真鍋町⑦・福島県神谷作101号墳③・群馬県上芝古墳例⑨がある。埼玉県有勝寺北裏埴輪窓跡例⑨は珠文を全面に配し、舞は波形である。舌は一般的に馬形埴輪本体に貼付されるが、本例は馬蹄に貼付しており類例は存在しない。伝群馬県例⑩-1は、珠文を全面に配し、舞は直線的な波形を呈する。茨城県真鍋町例⑦は側刃が直線的である。文様は珠文を数は少ないが全面に配している。舞は直線的な波形を呈し、切り込みも深い。福島県神谷作101号墳例③は、破片資料からの復元であり、形態に疑問が残る。しかし文様は、珠文と沈線で構成されることは間違いないであろう。群馬県上芝古墳



第8図 馬蹄装馬形埴輪の分布



第9図 馬形埴輪 (1)



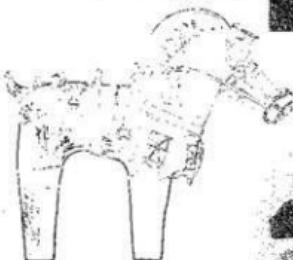
24. 埼玉県深谷山8号墳跡



25. 埼玉県熊谷市



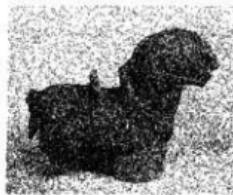
26. 佐倉市熊谷山



34. 埼玉県岩槻5号墳



35. 桶川市川口谷



36. 川越市古谷上



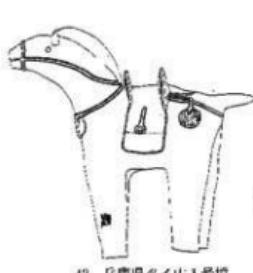
37. 千葉県山田宿馬188号墳



38. 神奈川県大勝寺古墳



39. 神奈川県多摩原古墳



42. 兵庫県タイヤ山1号墳



(番号は第2表に一致する)

第10図 馬蹄装馬形埴輪 (2)

例⑨は、墳頂で区画しその上に珠文を配している。沈線文系には、太沈線の区画交差文の埼玉県木の本10号墳例⑩と交差文の同桜山窓跡例⑪がある。細沈線文系には複綾杉文の埼玉県東浦古墳例⑫があり、文様構成は前時期の天祥寺裏古墳例⑬・2と同じである。酷似するものとして埼玉県瓦塚古墳例⑭-1がある。しかし、本例は中央の墳頂のみを挟んだ綾杉文であり、片側は同方向に斜線が施された単綾杉文となっている。区画交差文には、茨城県白方5号墳例⑮がある。文様は上下に四角く区画された中に交差文をそれぞれに配している。

該期の特徴は、直線的な波形の舞が出現する。

第五段階

扁平型と中実型は存在しない。製品型には千葉県船塚古墳例⑯がある。文様は珠文を3点配している。舌は存在しないが、舞は上方に湾曲しており忠実に模倣している様子が見える。

覆型には、珠文系・沈線系・列点文系・無文系の各種がある。珠文系には、群馬県オトカ塚古墳例⑰がある。文様は墳頂を上辺と中央から垂下させ、墳頂上を含め全面に珠文を配している。側面及び側面は直線的で、横断面は三角形を呈している。舞は直線的な波形に範切りされており、切れ込みも深い。珠文系と沈線文系の融合したものが伝埼玉県御手長山古墳例⑱で見られる。本例は細沈線を肋骨状に描き、中心部の沈線の交点に珠文を配している。舞は波形である。沈線文系には群馬県雷電神社跡古墳例⑲がある。写真観察によれば綾杉状の文様が存在するように見える。舞は浅い波形である¹⁶⁾。列点文系には、群馬県下谷古墳群例⑳がある。文様は全面に竹管文を配している。側面及び側面は直線的で、舞も直線的な波形に範切りされており、切れ込みも深い。群馬県オトカ塚例⑰と全体の形態が類似する。無文系には、千葉県船塚古墳例⑯がある。舞は直線的な波形で範切りで成形されている。

該期の特徴は、大形化と範切りによる直線的な波形の舞の形態が安定する。

次に、各段階の概要を記しておきたい。第一段階より扁平型・中実型・覆型、文様では珠文系・沈線文系があり¹⁷⁾、製作者の系譜が複数存在したことが予想される。しかし文様・形態・舌の欠落など当初より馬蹄が忠実に模倣されることはない。この傾向は、最終段階まで同様である。該段階の特徴は、舞が上湾曲ないし直線的に表現されている。第二段階になると覆型の珠文系が出現することである。舞は前段階と同様である。第三段階になると珠文系・沈線文系の型式が安定する。舞は波形と下方突出形、および舌を表現したものが出現する。第四段階は、前段階の様相が展開する時期である。舞は直線的な波形が出現する。第五段階は、側面・側面が直線的に表現される。舞も範切りで成形され、切れ込みの深いものが出現する。上記のようにまとめられるが、各段階の様相は雑然としている。その最も大きな理由は、馬形埴輪製作者が馬蹄を実見していないことに原因であろう。

実年代については、便宜的におおよそ第一段階を5世紀第4四半期、第二段階を6世紀第1四半期、第三段階を6世紀第2四半期、第四段階を6世紀第3四半期、第五段階を6世紀第4四半期から7世紀初頭に比定しておきたい。

(3) 分布と系譜(第8図)

馬蹄装馬形埴輪は、当然ではあるが埴輪の盛行する東北地方南部から関東地方にかけて多く分布

している。出土地が伝承であるものを含め特定されている42遺跡のうち、中国1例・九州2例(内1例は石馬)以外の39例が関東に集中する。

分類した各種の系譜について論じることは、絶対量が極端に少ないものが多く困難である。また、成形による各型の傾向も看取できない。ここでは比較的資料の多い珠文系と沈線文系について、その中心地と型式名を設定しておきたい。珠文系・沈線文系とも埼玉県から群馬県にかけてのC2地域(地域については後述する)に集中する。複型で珠文のみを配する「N A1型」は、埼玉県北部から群馬県にかけての地域に分布の中心があることから「上野系馬形埴輪装着馬鐸」と仮称したい。また複型の沈線文系の太沈線では文様は多様ではあるが「N B型」を「比企系馬形埴輪装着馬鐸」、製品型・複型で細沈線で複縞杉文「III・IV B1型」を「さきたま系馬形埴輪装着馬鐸」と仮称しておきたい。なお比企系馬形埴輪装馬鐸は東松山市桜山埴輪窯跡、さきたま系馬形埴輪装馬鐸は鴻巣市生出塚埴輪窯跡で出土していることから該窯跡で生産されていたことがわかる。

なお馬鐸装馬形埴輪は、それぞれの地域で最古級の埴輪に表現されている。例えば、A 地域では福島県丸塚古墳例、C 地域では群馬県若宮八幡北古墳例・同白藤 P6 号墳例である。また埼玉県では、埼玉二子山古墳例がある。先行する埼玉稻荷山古墳からは馬鐸装馬形埴輪は確認されていないが、「さきたま系馬形埴輪装着馬鐸」と埼玉古墳群が緊密な関係を有すると判断されることから、稻荷山古墳から馬鐸装馬形埴輪が発見される可能性は極めて高いものと思われる。「稻荷山古墳は、東日本ではもっとも早く、定形化した人物埴輪を施設した古墳」(金井塚1994)とされている。

3、馬鐸と馬鐸装馬形埴輪

(1) 馬鐸を装着する部位

馬鐸発祥の地である大陸では、馬鐸(馬鈴)は胸繫に装着するものであった。半島でも三国時代には胸繫に馬鐸を装着するのが盛行した¹⁰⁾のに対し、逆にその頃大陸では杏葉が基本となっているという(森1988)。我が国の馬鐸の形態は、大陸・半島のそれを扭形としてはいるものの「鳴り物志向」¹¹⁾の延長上に独自に展開したことは文様などを見れば明らかである。しかし、胸繫に装着するという意識は初期には継承されている。

馬の殉葬の希薄な我が国においては、馬鐸の出土位置から装着部位を確定できる例はない。そこで共伴して出土する馬具との関連からこの問題を考えてみたい。馬鐸以外に胸繫・尻繫に装着される馬具に環鈴・杏葉・馬鈴がある。5世紀代では、馬鐸と三環鈴が共伴する例が新潟県飯綱山古墳(3点)・滋賀県新開古墳(2点)・伝大阪府大山古墳(?)・福岡県月ノ岡古墳(?)・宮崎県下北方5号墓(1点)にある。環鈴は馬具以外の使用も考えられるが、尻繫に装着した例が埼玉県広木大町15号墳(小瀬1980)・伝長野県飯田市高松古墳¹²⁾・広島県綠岩古墳(桑田1983)出土の馬形埴輪に表現されており、馬具として使用されたことが確認できる。また、埼玉県稻荷山古墳では、三環鈴が1点出土しているが、鏡板として使用していたものと考えている。該期の馬装は、胸繫に馬鐸・尻繫に環鈴を装着することを一つの基本としている。また馬鐸のみを出土する古墳には、5世紀代の宮城県吉内1号墳・宮崎県小木原3号墓、6世紀代の福島県小池原8号墳・愛媛県東宮山古墳があることから胸繫に馬鐸のみを装着した馬装も存在したことも推察される。更に5世紀代の茨城県上

野古墳では3点の馬鐸と3点の剣菱形杏葉が共伴しており、前者が胸繫・後者が尻繫に装着されたものと想定される。また初期の馬鐸は、鈴と共に伴する例があり、胸繫に鈴・尻繫に馬鐸を装着する馬装も考えられる。

6世紀代にかけては鈴杏葉や他の杏葉と共に伴するようになり、胸繫に馬鐸・尻繫に杏葉が基本的な馬装となる。

馬形埴輪に表現された馬鐸は、胸繫に装着された例が圧倒的に多い。しかし、胸繫と尻繫の両者に装着された例も福島県丸塚古墳例・群馬県オトカ塚古墳例・同白藤古墳群などで見られる。また、尻繫のみに馬鐸を装着したものとして伝群馬県赤堀町例・埼玉県割山埴輪窯跡例があるが、これらは共に胸繫に馬鈴を装着している。なお馬鐸装の場合、胸繫に杏葉を装着するものはない。このことから馬鐸は、原則として胸繫に装着するものであるものの、厳密に装着部位が規定されていなかつたことがわかる。埼玉県立さきたま資料館の展示パネルには、鞍に馬鐸を装着した図や片方の引手に環鈴を1点装着した図が掲載されている。剣菱形杏葉を額に1点装着する例が存在する（官代1996）ことから、単体で出土する馬鐸・環鈴も任意の箇所に装着することがあったのかもしれない。

(2) 馬鐸の数

一つの古墳から出土する馬鐸の数は、1点が26遺跡・2点が12遺跡・3点が13遺跡・4点が4遺跡・5点が4遺跡^[11]・6点が1遺跡である。1・2点を装着した馬形埴輪は存在せず、馬鐸装馬形埴輪に表現された馬鐸の数とは必ずしも一致しない。しかし、宝器的意味合いの強い古い時期には、上述したように1・2点の馬鐸を装着した馬装も存在したことが予想される。

胸繫に表現された馬鐸装馬形埴輪の馬鐸の数は、3～4点のものが最も多い。5点を装着したものには、神奈川県夢原古墳例と石馬の福岡県岩戸山古墳例がある。また、群馬県オトカ塚古墳では胸繫に4個・尻繫に2個の計6個、同白藤古墳群P6号墳では胸繫3個以上・尻繫2個の計5個以上の多くの馬鐸を装着している。

なお一つの古墳から出土する馬鐸装馬形埴輪は、1体が最も多い。そしてその馬形埴輪には、実際に装着されている資料をみると同一種の馬鐸が装着されている。馬鐸片が複数出土する場合も、それらは同一形式のものであり、1体に装着されていたことを窺わせる。ただし、兵庫県タイ山1号墳例は同種の馬鐸を装着した2体の馬形埴輪が存在する。また、異種複数の馬鐸装馬形埴輪を出土した例として埼玉県瓦塚古墳・同東浦古墳と千葉県殿塚古墳例の三者があり、複数の馬鐸装馬形埴輪が存在したこと予想される。

ところで馬鐸の出土数は約140個であるのに対し、馬形埴輪に表現された馬鐸の数は少なくとも170個^[12]を数える。

(3) 馬鐸と馬鐸装馬形埴輪の分布(第8図)

ここでは馬鐸装馬形埴輪が盛行し、馬鐸との関係を検討できる関東地方を中心に考えてみたい。馬鐸および馬鐸装馬形埴輪は、おおよそ分布域に共有している。そこで次のような分布圈を設定しておきたい。A 地域：福島県、B 地域：栃木県から茨城県、C 地域：埼玉県中部から群馬県、D 地域：千葉県北部、E 地域：東京湾岸の5地域である。しかし馬鐸と馬鐸装馬形埴輪の分布は若干相違するので、例えばA 地域ならば前者を A1 地域、後者を A2 地域とした。もとよりこれらの分布

固は恣意的なものであり、新出資料によって修正されるべきものであることは言うまでもない。

- A 地域：馬鐸 4 例と馬鐸装馬形埴輪 3 例が存在する。馬鐸は浜通りの南北に離れて分布する。馬鐸装馬形埴輪も同様であるが、中通りにも存在する。
- B 地域：馬鐸 2 例と馬鐸装馬形埴輪 5 例が散在するのみで、傾向を指摘することはできない。馬鐸は共に時期が相違する。馬鐸装馬形埴輪は茨城県大和村例が不詳であり、他も型式を異にする。地域圈としてまとまりは認められない。
- C 地域：馬鐸は埼玉県北部から群馬県にかけて分布するのに対し、馬鐸装馬形埴輪は荒川以南¹²⁾の埼玉県中部にまで認められ、分布範囲が前者よりも広い。しかし、さきたま古墳群周辺には、馬鐸装馬形埴輪が集中して分布することから将来馬鐸が確認されることを予測しておきたい。
- D 地域：馬鐸 3 例と馬鐸装馬形埴輪 3 例が存在する。両者は近接するとは言うものの馬鐸が下総、馬鐸装馬形埴輪が上総にあり分布を違えている。
- E 地域：馬鐸 2 例と馬鐸装馬形埴輪 2 例が存在する。馬鐸は東京湾東岸・馬鐸装馬形埴輪は西岸に存在し、時期も相違することから有機的な関連はないものと推察される。
- A・C 地域では馬鐸と馬鐸装馬形埴輪の分布が重なり合うが傾向が強いが、他の地域では、分布地域を異にする傾向がある。

まとめ

(1) 馬鐸と馬鐸装馬形埴輪の関係

馬鐸装馬形埴輪の存在は、「埴輪祭式に表現された儀式」において馬鐸を装備した馬が存在したこと意味するのであろうか。つまり飾り馬は、馬装を忠実に表現しているのかという問題である。馬形埴輪に限らず、形象埴輪(群像)が実物(場面)をどれだけ忠実に模倣しているのであろうか。

この問題に対し比佐陽一郎は疑義を呈している。比佐は、千葉県の古墳に副葬された馬具と馬形埴輪の関連について次のようにまとめている。「馬形埴輪を立て並べている古墳に、必ずしも馬具が副葬されているとは限らない。仮に馬具を副葬している場合でも、双方の馬装に関連性は乏しく、偶然と考えられる。(中略)馬形埴輪には、実物からは形の掛け離れたものや、実物には今のところ存在しない馬具が表現されているものがある」とした。そして「馬形埴輪の製作された状況に関してても、(一)埴輪製作地の周辺の実際に存在した馬具を手本に製作された場合、(二)製作地から離れた地域の馬具を手本にして製作された場合、(三)他の馬形埴輪を手本をしたり、或いは工人間の情報伝達によって製作された場合、(四)工人の想像によって製作された場合、といった複数の可能性が考えられる」が、千葉県では(三・四)の場合が多いとした。そして「仮に実際の馬具を見ずに馬形埴輪が作られることが多いとなれば、当時の馬装を復元するための参考にできる資料は限られてくることになる」(比佐1992)とし、馬形埴輪と馬具の短絡的な関連性を戒めている。いっぽう井上裕一は、実際の馬装から遊離し型式化する時期も存在するが概ね忠実に反映しているものと捉えている(井上1996)。しかし実際には、出土馬具と馬形埴輪の馬装の関連性を見いだせる例は少なく、比佐の憂慮は当然であるとも言える。

馬鐸と馬鐸装馬形埴輪は、群馬県(C 地域)や茨城県(A 地域)を除いて分布域が一致せず両者の関連は存在しないかに見える。群馬県についても両者の出土例が多いことから、分布の重複は見せかけの可能性がある。しかし、実際に馬鐸と馬鐸装馬形埴輪が共伴する例が兵庫県タイ山1号墳、また確実に共伴したとは言えないが福島県神谷作101号墳(高島他1991)で認められる。共伴ではないが近接して出土する例として埼玉県本の木10号墳の馬鐸装馬形埴輪と東川端遺跡の馬鐸・群馬県保渡田八幡塚古墳の馬鐸装馬形埴輪と保渡田茶師塚古墳の馬鐸・福島県相馬市丸塚古墳の馬鐸装馬形埴輪と高松山1号墳の馬鐸がある。また、馬鐸に限らず副葬馬具と飾り馬の馬装が一致する例もあり、両者の有機的関連性を一概に否定することも短絡的すぎるのではないかだろうか。

ところで埴輪群像の意味には、幾つかの解釈がなされている。土なものには、もがり・首長椎繭承儀礼・葬列・牛前頭彰などを再現したなどの諸説がある。いずれにしろ人物埴輪群は、型式化された儀式などの場面を観念的・象徴的ではあるが、同時に具象的に表現した可能性の高いことは前著で指摘した(中村1995)。個々の人物埴輪についても実在する人物の風貌や装束など可能な限り忠実に模倣したものと思われる。例えば、千葉県姫塚古墳の人物埴輪群に典型的に顕現しているように、顔の表情をはじめとして冠・着衣など意識的に作り分けられ、同一の表現を有する人物埴輪は存在しない。また、埼玉県生出塚埴輪窓跡からは多くの馬形埴輪が出土しているが、胸聚の飾り物などが作り分けられている。埴輪群は儀式などの場面を象徴的に表現したもので、臨席者の個性を現出させる必要はないかも知れない。しかし「儀式」における各種の役割を果たした人物は、特定の個人であることから、実在のモデルを埴輪製作者の技能の範囲において、可能な限り忠実に表現したものと考えられる。馬形埴輪もまた同様である。現象的には、比佐が指摘するように副葬馬具と馬形埴輪の馬装が一致するのは稀有である。それは馬具が他者に下賜されたり伝世⁽¹⁾されることによって、実際に副葬された馬具と馬形埴輪に表現された馬具が一致しないものと考えたい。例えば4点の内3点の同型の馬鐸を出土した兵庫県タイ山1号墳では、そのどちらかが伝世されたのである。また同古墳からは馬鐸装馬形埴輪も出土しており、両者の有機的関係が存在する可能性が高いことも前述したとおりである。複数の馬鐸を出土する例のうち、異種のものが混在しているのは、一方が伝世した可能性は極めて高いものと考えられる。

馬形埴輪の馬装も人物埴輪と同様に細部を遺して個性を主張している。馬形埴輪の装飾馬具は、胸聚に限っても馬鐸・杏葉・馬鈴あるいは無装飾のものなど多様である。これらの選択が埴輪製作依頼主や製作者の趣味や恣意によるものではないことは容認されよう。装飾馬具が下賜品であるならば、それは自らの身分表象であり権威の象徴だからである。それを永遠の構築物である古墳に樹立する埴輪に表現することは、趣味で済まされる問題ではない。ここに虚偽は許されないだろう。鞍を載せた飾り馬でありながら、胸聚・尻繁に装飾品を表現していない馬形埴輪が多数存在する。古墳上に華やかな場面を表現したいのであれば、自らの願望する装飾馬具を装備した馬形埴輪を作成依頼したであろう。しかし、それは許されない。無飾の鞍馬の製作依頼主は、装飾馬具を装備した馬形埴輪で古墳を飾ることは適わなかったのである。一古墳から出土する馬鐸と馬鐸装の馬形埴輪との関係、あるいはこれら両者の分布の有り方などから考えられると、現象的には両者の関係を積極的に結び付ける事象は希薄である。しかし埴輪群に表現された世界は、実相を可能な限り表現

した可能性の高いことは前述したとおりである。

ところで馬形埴輪に装着された馬鐸を実見してきたが、忠実に表現された資料は皆無である。埴輪製作者の技術的な制約に帰着できる問題ではない。これは埴輪製作者が実物を実見していないことを意味している。埴輪製作者は埴輪群像に表現された場面に臨席しない「身分⁽¹³⁾ないし関係」であったのであろう。また、埴輪製作依頼主も実物とは相連する馬形埴輪に異議を唱えていない。そこに「記号」としての馬鐸が表現されていれば良かったのである。

なお埴輪製作依頼主(樹立主体者)と埴輪製作者の関係は直接なものではなく、両者は共に「在地首長」に統轄されていたことが予想される。埴輪生産も「在地首長」の管轄下にあった。埴輪が必要な場合は、まず依頼主が埴輪の種類や個体数などを「在地首長」に申請し、それを受けて「在地首長」は審査した後に、埴輪生産者に製作を許可・要請したのであろう。馬形埴輪の馬装についても表現する装飾馬具の種類が指示されたものと思われ、埴輪樹立主体者の恣意によるものではないのである。

(2)馬具は「畿内政権」からの下賜品か

特に装飾馬具については、「畿内政権」からの下賜品と捉える見解で一致しているようである⁽¹⁴⁾。その例を幾つか挙げておけば、まず九州出土の環鈴をまとめた石山黙は「(九州出土の環鈴に限れば、渡海軍の一隊を率いる将に対して)中央政権から、その地位の証・象徴として与えたものと推定したい」(石山1980)とした。鈴杏葉をまとめた永沼律朗は「東国に分布する鈴杏葉や鏡板は、東国首長が若き日に王宮におもむき奉仕した際に赐わったもの」(永沼1983)とし、同じく斎藤弘は「鈴杏葉は畿内政権によって配布されたもの」(斎藤1984)とした。更に、岡安光彦は「舶來の馬具、あるいは(中略)それを模倣した國産の馬具は、大和政権から各地の首長に対して、その関係の軽重に基づく内容をもって下賜された」(岡安1988)と考えている。馬具下賜品説は、これら優品の装飾馬具⁽¹⁵⁾が規格性を有し、「地方」では技術的に製作が不可能であるとの考え方から、必然的に「中央」で集中生産されたという前提に立っている訳である。しかし、飾大刀を分析した瀧瀬芳之は畿内政権から地方豪族への下賜のみではなく、地方豪族からさらに下位の者への下賜も有り得ることを指摘している(瀧瀬1984)。その上で、飾大刀の製作地・製作者集団の「すべてが畿内に存在したとは判断しにくい。需要の拡大にともない、地方に拠点を設けたと考えたい」(瀧瀬1984)とし、畿内政権の一括生産・一括下賜に疑問を呈している⁽¹⁶⁾。また瀧瀬は、馬鐸の分析でも同時期に多数の型式が存在することを指摘しており(瀧瀬1990)、畿内政権の集中生産説を再検討する必要を示唆している⁽¹⁷⁾。馬具等が下賜されたものと仮定しても、それは「大王」家からのものとは限らず、「畿内政権」を構成する有力氏族との関係も考慮すべきであろう。

ところで馬鐸に限らず下賜されるとされる馬具などの優品は、被下賜者を想定(意識)して必要数を同時に製作したものと考えたい。馬鐸に限らず、それらの製品は同型であろうことが予想される。しかし、古墳出土の馬鐸は異型式のものが混在するばかりでなく、馬装に必要な数を備えていないことが多い。3~5個の馬鐸を出土する場合でも製作時期の異なる伝世品で混成されているのが通例である。つまり、下賜品であるはずの馬鐸が被下賜者の墓に副葬されないことが多いのである。下賜品が被下賜者の私有物としての性格が強いのであれば、被下賜者の死に伴って副葬されるのであろうが、威信財としての意義を有するうちは繼承者に移譲されたのであろう。下賜品の可能性の

ある馬具などは、伝世されるのが通例なのである。そしてその意義を喪失した時点やそれを継承すべき者が特定の集団内に存在しない場合は削除されたものと考えたい。

このように、馬具は被下賜者の死後も時間を超えて現世に存在しつづけたのである。また、馬形埴輪の馬装が忠実に模倣されていると仮定するならば、それを下賜された者以外の者、すなわち所有者以外の使用も想定できる。例えば関東各都県の馬銜と馬鐸装馬形埴輪の個体数の関係を見ると茨城県では馬銜3・馬鐸装馬形埴輪4、以下同様に栃木3-1、群馬19-12、埼玉3-20、東京0-0、神奈川0-2、千葉17-3となる。馬銜は3~4個で馬装を形成することから、千葉県を除いて馬鐸の数が馬鐸装馬形埴輪の数より圧倒的に少ないことがわかる。これは、馬鐸が他者に貸し出されてこと意味している可能性がある。馬鐸装馬形埴輪をもつ古墳から必ずしも馬銜が削除されていない理由に、それが借用されたもの、ないし埴輪群に表現された場面に馬銜を有する他者の参列があったことなどが想像される。飾り馬は馬形埴輪に表現された場面のみではなく、ハレの場面には度々必要とされた馬装なのである。埼玉県酒巻14号墳の輶差し物を表現した馬形埴輪の存在は、同古墳の被葬者が輶差し物を所有していたものではなく、それを出土した近接するさきたま古墳群の將軍山古墳の被葬者に關係する者が、前者の埴輪に表現されている場面に参列していることを意味していたのではないだろうか。いずれにしろ埴輪群像は、ある場面を忠実に表現しているものと理解したい。

おわりに

現在、尻繁・胸繁に表現された杏葉・馬鉢・無装馬形埴輪とそれらの馬具との関係について調査を進めている。これらの装飾品の相違が何に起因しているのかを究明するためである。古墳時代の身分制に関して都出比呂志は、主に前方後円墳と円墳の關係を徳川幕府の「譜代大名と外様大名」、あるいは現代の公務員の「号俸と等級」の二重規定に基づく支配原理が働いていたと比喩し「この時代の首長の身分は、大きさだけもなく、墳形だけでもなく、規模と形の二つの原理の統合で決まる性格のもの」ということができる(都出1989)とした。しかし馬鉢などの馬具に限らず、その他の大刀や冠などの優品を出土した古墳には、小規模な円墳も多くあり「規模と形」に拘る「前方後円墳体制」に代表される畿内政権との政治的な關係だけではなく、別次元の「モノ」を介した關係も存在したのではないだろうか。

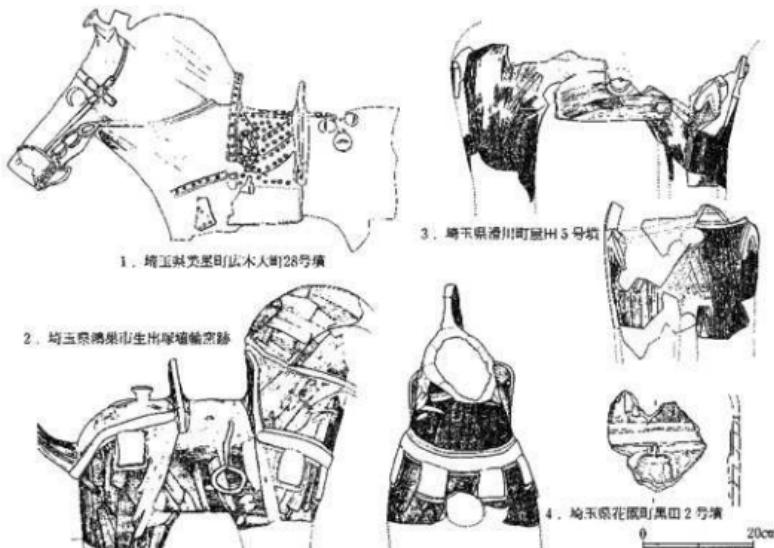
本稿を草するにあたり、馬鉢については瀧瀬芳之氏、馬形埴輪については大谷徹と若松良一の両氏にご教示を得ました。また畠友鈴木健雄・利根川草彦の両氏には、本稿に限らず考古学の方法論や考古学に対する姿勢など日頃から多くご指導を戴いている。しかし各氏のご教示にも関わらず、本稿も実証的な論文というには程遠いものなものとなってしまったことを反省している。なお下記の方々には、資料の実見に際して便宜を計って戴くなどのご協力を得ました。心より厚くお礼申し上げます。

相川之英 井上裕一 岩瀬謙 江原昌俊 太田博之 岡本健一 瓦吹堅 小島純一
佐藤好司 塩野博 塩谷修 島田孝雄 杉山晋作 外尾常人 高橋信一 田中順三
田中広明 田辺芳昭 戸田伸夫 戸田正勝 中村香葉 橋本博幸 長谷川勇 服部敬史

浜名徳順 日高 恒 星岡孝志 福間 元 松澤清一 松尾昌彦 森下章司 萩下 浩
山崎 武 山崎義大 山本 靖 横田 宏 若松良一 三ツ木貞夫
内田郷土博物館 群馬県立東毛養護学校 田中純文化館 福島県立磐城高等学校
(本稿は、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の平成7・8年度研究助成金の成果である)

（註）

- (1) 馬装に限らず、冠・ベルト・鎧甲など装飾についても装束を完備した状態で出土することはない。それらは單品であっても威信財としての性格が強いのであろう。
- (2) 第2表の他に「馬鞍装」と報告されている馬形埴輪が存在する。しかし群馬県太田市向田別所古墳出土例(島田1996)は、粘土板を方形に貼付したもので埼玉県鴻巣市生出塚埴輪室・同駒西町小沼跡地遺跡・同大宮市井川古墳出土例と同様なものであり、馬鞍と認定するには若干の疑問を有する。鉄鏡形台袋ないし皮革製の装飾品ではないだろうか。また、同県太田市東毛養護学校南出士例(島田1996)についても、「馬鞍?」と記載されているが、本資料は鉢が剥落した痕跡であり、破片資料の中にも馬鞍を確認することはできなかった。更に同赤城村出土例(国学院大学蔵)の馬形埴輪の馬鞍は全て後補されたものである。
- また、馬鞍装の可能性のある馬形埴輪も存在する(第11図)。全て扁平型である。広木大町28号墳例(1)は、竹管文を配したもので、福島県丸塚例に類似する。生出塚埴輪室跡例(2)は、方形を呈するもので前述した通りである。屋塚遺跡5号墳例(3)は、群馬県太田市成塚出土の房状飾り具と同様なもの、黒田2号墳例(4)は、鐘形杏葉と捉えられている。埴輪製作者の実物の認識度を考えると、これらを馬鞍でないと断定することはできない。
- (3) 扁平型は馬鞍でない可能性もあるが、轍が上方に彎曲する形態のものを馬鞍と認定しておきたい。しかし、埼玉県浦川町屋田5号墳例(第11図3)は同様な例と考えられるが、群馬県太田市西長岡出土馬形埴輪の結び紐の退化した表現とも思われる所以除外した。



第11図 馬鞍装の可能性がある馬形埴輪

- (4) 兵庫県タイ山1号墳の1号馬には3点の馬蹄が胸輪に装着されている。写真を観察すると刺突が施されているよう眼窓できる。なお2号馬に装着された馬蹄の文様は無文である。また、刺突文系のうち群馬県下谷古墳群例は、珠文系の退化したものと捉える方が適切であると思われる。
- (5) 本資料は、小破片のため全体の概要を把握することは困難であるが、胸器に鈴と馬蹄、尻繁に三鈴杏葉を装着していた可能性がある。つまり、白鹿古墳群T6号墳例と同様な馬装である可能性がある。
- (6) 伝埼玉県御手足山古墳例と群馬県雷電神社跡古墳例は、馬蹄を胸輪に装着する部位の表現が同一のようである。
- (7) 馬蹄の模様は、区画のための沈線とその内部を充填する珠文で構成される。しかし馬形埴輪の装着された馬蹄は、それらの一方を表現しているものがほとんどである。
- (8) 滋賀県立安土城考古博物館の展示パネルによれば、橿原国立中央博物館には胸輪中央に馬蹄1個、その両側に小形馬蹄6個ずつ、尻繁には片側に心葉形杏葉2個・魚形杏葉1個、不明杏葉1個を装着した馬が復元されているという。胸輪に馬蹄、尻繁に杏葉が基本になっていることが窺える。
- (9) 鮎持馬には、華美とも思える装飾が施されている。なかでも、鈴・鈴付杏葉・馬蹄・環鈴など鳴り物が腰袋であり、設板にも鈴を装着したものがある。鳴り物を装着した半良馬馬は、東日本で頗るある。项鈴・鈴鏡は巫女が着けると同時に馬具としても使用された。鈴鏡を尻繁に装着した福島県丸塚古墳例などがある。
- (10) 埼玉県立博物館の蔵品にある。
- (11) 兵庫県タイ山1号墳では、4点の馬蹄が出土した。しかし、同所では東京国立博物館蔵品で、同范と思われる1点が出土しており、これを含めると5点の馬蹄が副葬されていた可能性が高い。同古墳は一部が破壊されており、その時に出土したものと考えられる。なお、兵庫県立歴史博物館の特別展の図録「大王の世紀」(藤宮・小林 1996)では、東京国立博物館蔵品を同古墳出土として紹介している。
- (12) 実際に馬形埴輪に表現された数と1点のみを出土した遺跡数に4倍した数の合計である。「4倍」の理由は、埴輪に装着された馬蹄の平均であるからである。
- (13) 荒川以南の南端に分布する桶川市川田谷・川越市吉谷上の2例の馬蹄装馬形埴輪は、資料の実見が透わらずその存在を確認していない。
- (14) 栃木県星の宮神社古墳では、4点の馬蹄が出土しているが、これらの製作時期は大きく異なる。
- (15) 塩輪製作者は、「工人」であり、過大の評価を期待することは危険である。しかし、身分が低いという意味ではない。例えば埼玉県生出塚古墳群は、生出塚窯で埴輪を製作していた工人の墓と考えられる。
- (16) 馬具に限らず大刀も同様に下駄されたものと捉えられている。瀧瀬芳之は「6世紀後半には、地方支配体制を確立しようとする畿内政権の政治的な働きかけが存在し、その働きかけのひとつとして、地方有力豪族層に対して賜与という行動を通じた懷柔策を計ったと推定される。大刀はそのためひとつ手段として組みこまれていたと考えられる」(瀧瀬1984)とした。
- (17) 5世紀代やその後開拓する幅々の馬具の相撲は、舶載品と考えられているものが多い。舶載品の認定には明確な根拠が示されていないが、その存在は認めておいておきたい。それでは舶載品は、どのような経路で招来したのであろうか。古く卑弥呼は魏に朝貢し、返礼として「鉢」を下駄されている。舶載馬具が故地からの下駄品なのか貢納品なのか、あるいは略奪や交易によるものかでは、その資料の歴史的 existence は全く異なる。
- (18) 馬具に限らず当時の優品が小円墳や横穴墓から出土することがある。飾大刀を分析した瀧瀬芳之は、この問題に対して「畿内政権による直接の懷柔策の結果みなすには少々無理があろう」とし、これらは上位の在地豪族層から賜与されたものと考えた。
- (19) 畿内政権は、「大王」とそれを支えた有力氏族とで構成される。各有力氏族が独自の技術者を掌握していた結果、多様な馬具などが生産されたのではないだろうか。生産・下駄を「大王」が統轄していたのであれば、畿内政権の集中生産・一括下駄ということで捉えられるであろうが、畿内政権とは相対的に独立した有力氏族と地方首長の直接的な関係も考慮しなければならないだろう。更に地方首長が独自のルートで舶載品を輸入したり、技術者を招来させて生産した可能性も視野に入れておく必要があるものと思われる。

参考文献

- あ 安藤鴻基 1988 「千葉県成田市所在 竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書」 千葉県教育委員会
青木豊昭 1990 「丸山4号墳と馬具等出土遺物について」 越前・若狭の馬具出土古墳の中での位置づけ—福井県考古学学会誌 第8号 福井県考古学会
石川県立歴史博物館 1994 「春季特別展 はにわ」
石山 順 1980 「九州出土の環錐について」 古代探査Ⅱ 滝口宏先生古希記念考古学論集 早稲田大学出版部
石野博信他編 1992 「古墳時代の研究Ⅸ 古墳Ⅲ埴輪 雄山閣
柄村 純 1986 「群馬県における馬形埴輪の変遷」—上芝古墳出土品を中心にして 『MUSEUM』 No.423
井上貴司 1988 「井上コレクション 弥生・古墳時代資料図録」 言叢社
井上裕一 1985 「馬形埴輪の研究—製作技法を中心として—」『古代探査Ⅱ』 早稲田大学考古学会創立35周年記念考古学論集 早稲田大学出版部
井上裕一 1995a 「馬形埴輪の研究 両頭の設定」『古代探査Ⅳ』 早稲田大学出版部
井上裕一 1995b 「形象埴輪政策者と馬形埴輪」『古代』第100号 早稲田大学考古学会
井上裕一 1996 「武藏の馬形埴輪」『埴輪研究会誌』第2号 塩輪研究会
今津寅生 1988 「企画展 東国のはにわ」深い眠りからさめた埴部たち 福島県立博物館
上田哲也 1982 「長尾・タイ山古墳群」 龍野市文化財調査報告書III 龍野市教育委員会
上野利明・中西克宏 1985 「大賀世2・3号墳の出土埴輪について」『紀要I』 東大阪市文化財協会
宇野慎敏 1991 「日本出土の冠帽とその背景」『九州上代文化論集』
江原昌俊 1993 『岩鼻遺跡(第2次)』—埼玉県東松山市埋蔵文化財発掘調査報告書一 東松山市文化財調査報告書第21号 東松山市教育委員会
太田博之 1988 「酒巻古墳群」 行田市文化財調査報告書第20集 行田市教育委員会
大橋泰人 1986 「星の宮神社古墳・米山古墳」栃木県文化財報告書第76集 栃木県文化振興事業団
大塚貞弘・鈴木与志子・柳隆芳 1987 「蓼原」 横須賀市教育委員会
阿林孝作「冠・帽」「古墳時代の研究」8 古墳II 副装品 雄山閣
岡安光彦 1988 「心葉形鏡付板背・杏葉の編年」『考古学研究』第35巻第3号(通巻139号) 考古学研究会
岡村和了 1982 「桜山窓跡群」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第7集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
か 金井康良 1994 「五 人物埴輪の伝播と河内」『古代を考える 東国と大和王権』吉川弘文館
龟井正道 1995 「人物・動物はにわ」『日本の美術3』346 至文堂
河原隆彦 1982 「第3節 馬鹿の出上地及びその編年と考察」『長尾・タイ山古墳群』 龍野市文化財調査報告書III 兵庫県龍野市教育委員会
群馬県古墳時代研究会 1996 『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』群馬県古墳時代研究会資料集第2集
群馬県立歴史博物館 1979 「開館記念展 群馬のはにわ」
群馬県立歴史博物館 1993 「第46回企画展 はにわ 一秘められた古代の祭祀」
桑田俊明 1983 「縄岩古墳」 広島県教育委員会
小島純一 1989 「白蘿古墳群」 柏川村教育委員会
国学院大学考古学資料館 1977 「考古学資料館要覧」 1976 関東の古墳時代文化 国学院大学
小久保徹 1988 「県内主要古墳の調査(I)」『調査研究報告』第1号 埼玉県立さきたま資料館
小林行雄 1960 「埴輪」 陶器全集1 平凡社
小瀬良樹 1980 「広木大町古墳群」 埼玉県遺跡調査会報告第40集 埼玉県遺跡調査会
斎藤 弘 1984 「鈴杏葉の分類と編年について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
斎藤國夫 1994 「埼玉古墳群発掘調査報告書 愛宕山古墳・火祥寺裏古墳・二子山古墳・中の山古墳・陳馬遺跡(6・7次)」 行田市文化財調査報告書第31集 行田市教育委員会
早乙女雅博 1992 「伽耶文化展」 東京国立博物館

- 坂本和俊 1996 「武藏の前方後円墳」「東北・関東における前方後円墳の編年と歴史」 東北・関東前方後円墳研究会
- 坂本英夫 1985 「馬具」 考古ライブラリー34 ニュー・サイエンス社
- 坂本美大 1996 「剣菱形青葉模の分布とその背景」『考古学の諸相』故盐泽一先生追憶記念論集
- 坂本美大 1996 「剣菱形青葉模と階層剖とその背景」『研究紀要12』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター
- 塙谷 修 1990 「第3回特別展 常陸の埴輪・埴輪が語る古墳時代の常陸」土浦市立博物館
- 峰亮 正・小林基伸 1996 「特別展 大正の世紀 兵庫の古墳と遺跡」 兵庫県立歴史博物館
- 島田孝雄・金沢 誠 1996 「[2.旧山田郡]【群馬県内出土の馬具・馬形埴輪】 群馬県古墳時代研究会資料集第2集 群馬県古墳時代研究会
- 志村 哲 1996 「3.馬形埴輪の形態について!【群馬県内出土の馬具・馬形埴輪】 群馬県古墳時代研究会資料集第2集 群馬県古墳時代研究会
- 白井宏子 1988「冠」物集女車塚古墳
- 鈴木一有・斎藤秀雄 1996 「剣菱形青葉模出現の意義・伝岡崎出土資料をめぐる問題」『三河考古』第9号 三河考古刊行会
- 鈴木一男 1980 「横塚山三昧線塚古墳発掘調査報告書・井岡跡跡確認調査報告書」 小山市文化財調査報告書第9集 小山市教育委員会
- 背谷浩之 1976 「有勝寺北裏埴輪窯跡」《本庄市史》 資料編 本庄市
- 杉崎茂樹 1986 「瓦塚古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書第四集 埼玉県教育委員会
- 杉崎茂樹 1987 「二子山古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書第五集 埼玉県教育委員会
- た 高崎光司 1992 「新鹿敷遺跡B区」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第123集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 高島好一・松本友之 1991 「神谷作101号墳付近出土の馬鐸」『いわき地方史研究』第28号 いわき地方史研究会
- 高橋克壽 1996 「埴輪の世界」歴史発掘③ 講談社
- 高橋直美 1995 「冠帽考」『滋賀史学会誌』第9号 滋賀史学会
- 瀧口 宏 1963 「はにわ」 日本経済新聞社
- 瀧瀬芳之 1984 「円頭・半頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古墳文化研究会
- 瀧瀬芳之 1990 「東川塚遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第94集 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 館山市立博物館 1994 「企画展『神々の風景』—古代のカミへの捧げモノ—
- 田中順三 1992 「田中縄文文化館」 田中縄文文化館
- 田村圓准他 1985 「古代最大の内戦 番井の乱」 大和書房
- 千賀 久 1990 「特別展はにわの動物園 関東の動物埴輪の世界」 泽良忠立原原考古学研究所附属博物館
- 千賀 久 1991 「3馬具」『古墳時代の研究8』古墳II 副題品 雄山閣
- 都出比呂志 1989 「古墳時代の中央と地方」「古墳時代の王と民衆」古代史復元6 株式会社講談社
- 東京国立博物館 1978 「東京国立博物館目録・古墳遺物編(関東I)」 便利堂
- 東京国立博物館 1983 「東京国立博物館日録・古墳遺物編(関東II)」 便利堂
- 東京国立博物館 1984 「東京国立博物館日録・古墳遺物編(関東III)」 便利堂
- 東京国立博物館 1992 「よみがえる古代王国 伽耶文化展」
- 水沼律朗 1983 「鉢合墓考」『古代』第75・76合併号 早稲田大学考古学会
- 中村倉司 1995 「獣を蓄えた人物埴輪—渡来人の幻影をみると—」『土器考古』第19号 上野考古学研究会
- 中村潤子 1983 「広帯・山冠について」『古代学研究』101号 古代学研究会
- 南雲芳昭 1991 「群馬県における馬形埴輪の模様」『成塙石橋遺跡II』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 南雲芳昭 1993 「馬形埴輪における騎馬の基礎的研究」『研究紀要11』 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

- 西田健彦 1995 「世良田蹴下前」『発掘された日本列島』'95新発見考古速報 朝日新聞社
- は 長谷川 勇 1976 『本庄市史 資料編』 本庄市
- 長谷川 勇 1978 『御手兵山古墳発掘調査報告書』 本庄市教育委員会
- 比佐陽一郎 1992 「埴輪馬の馬具」『考古学と生活文化』同志社大学考古学シリーズⅨ 同志社大学考古学シリーズ刊行会
- 日高 慎 1994 「2遺物の概要」『埼玉県古墳詳細分布調査報告書』 埼玉県教育委員会
- 日高 慎 1994 「二子山古墳 瓦塚古墳」 埼玉古墳群発掘調査報告書第8集 埼玉県教育委員会
- 日高 慎 1995 「茨城県土浦市真鍋出土の馬形埴輪について」『埴輪研究会誌』第1号 塩輪研究会
- 平岡和夫 1993 『芝山町史』第2分冊 資料編I 原始・古代 芝山町
- 文化庁編 1995 『発掘された日本列島』'95新発見考古速報 朝日新聞社
- 堀田啓一 1967 「冠、垂飾耳飾の出土した古墳と大和政權」『古代学研究』49 古代学研究会
- ま 松尾昌彦 1995 「古墳時代の埴り馬」一馬利用のはじまりを探る— 松戸市立博物館
- 松阪市教育委員会 1988 「常光坊谷古墳群発掘調査概要II」
- 松村一昭 1969 『佐波郡東村の古墳』群馬県佐波郡東村々誌資料篇第1 東村々誌編さん委員会
- 松村 浩 1994 「町制40周年記念展 近江と馬の文化」 東近江市歴史民俗博物館
- 馬目順一 1980 「慶州動羅塔古墳羅蓋の研究」『古代探査』 早稲田大学出版会
- 宮崎由利江 1981 「割山遺跡」 深谷市埋蔵文化財発掘調査報告書 深谷市割山遺跡調査会
- 宮崎由利江 1987 「裸馬の埴輪に関して」『埼玉の考古学』 新人物往来社
- 宮崎由利江 1989 「埼玉県内における馬形埴輪の消長」『国学院大学 考古学資料館紀要』第5輯 国学院大学考古学資料館
- 宮崎由利江 1990 「馬形埴輪に伴出する人物埴輪について」『古代』第90号 早稲田大学考古学会
- 宮代栄一 1996 「倭人たちの馬装・面繫を中心にー」『'96特別展 黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館
- 茂木雅博 1993 『常陸白方古墳群』 東海村教育委員会
- 森浩一ほか 1991 『古代家族と朝鮮』 京都文化博物館編 新人物往来社
- や 安井良三 1967 「我が國発見の金・銀製華飾付耳飾り一装身具のセットについての試論ー」『史想』13
- 蔽下 浩・横山 宏 1993 『特別展 はにわ物語』 岐阜市立博物館
- 山田昌久 1989 「日本における古墳時代牛馬耕開始再論」『歴史人類』第17号 筑波大学
- わ 若松良一 1992 「3人物・動物埴輪」『古墳時代の研究』9 古墳田 墓輪 雄山閣

研究紀要 第13号

1997

平成9年3月25日 印刷

平成9年3月31日 発行

発行 財團法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木884

☎0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社